

図画工作・美術科における学び続ける子どもと教師

本年度の研究主題も、昨年度から引き続いて「学び続ける」ことが重要な事項となっている。昨年度紀要では次のことを確認した。昨年度紀要の一部を抜粋する。

「学び続ける」ということから考えてみる。人間は常に環境に学びながら生きている。いくつになっても人間は学び続けるものである。さらに、学び続ける理想的姿は誰かに強制されるものではなく、自らの意思でそうすることである。そのように考えると「学び続ける子どもの育成」のために、教師やまわりの大人は何ができるのであろうか。まず、教師やまわりの大人が子どもを見守り、認め、励ましていることを、常に子どもが感じられるようにすることが重要ではなからうか。(中略) 学び続けると一口に言っても、わるいことも含めて様々な内容を学び続けているものである。学校教育としては教科ごとに学び続けてほしい内容がある。それを子どもが学び続けるようになるにはどのようにすればよいのであろうか。それには教師やまわりの大人がその内容を学び続けている姿を見せることが重要なのではなからうか。学び続けることを楽しんでいる姿や熱中している姿を見れば、子どももその内容を学ぶことを真似するようになる。人間は本来そのような欲求を持っている。欲求の対象は自然に内側から発生するというより模倣されると言った方が正しい。教師やまわりの大人が「学び続けよう」と言わなくても、そのような姿を見せることで、子どもはその欲求を強く感じ取る。子どもは子どもであること、つまり未完成であることを自覚している。それだけに他人、特に教師やまわりの大人の欲求対象が子どもを方向づけよう。(中略) 図画工作・美術科に関して言えば、例えば教師が実際に楽しそうに制作をする姿を見せる。社会や学校が子どもに学ぶべき内容としているからではなく、教師個人がどうしようもなく楽しいから、その内容を子どもも学ぶと感じさせたい。

以上を踏まえて見れば、毎年の研究会で、授業者や参加した教師たちは、子どもを見守り、認め、励ましている。そして、学び続けている姿を見せている。もちろん、それは研究会のときに限ったことではなく、日々そうなのであろう。絶え間ない努力に脱帽の思いである。

そのようななか「学び続ける教師」を思うと、一つだけ気になることがある。例年、研究会で、実はこの教材は〇〇校の〇〇先生の実践を参考にしたもの、といった発言がよくある。それは先行実践者に対する敬意と学びの表明で、とてもよいことと思う。ただ、それは紀要や指導案には記されないで、その場だけの発言として消えていく。やはり、先行実践者をはじめ、その場にはいない人たちにも明確に伝わるように明記した方がずっとよい。それは自分が学んだ先行実践者に対する敬意のためだけでなく、自分の学びの質を高める習慣でもある。発表のどこが既にあったものを参考にした内容なのか、どこが自分の開発した内容なのかを明記することで、自分の思考や学びが潔く厳密になり、当該教材のオリジナリティを保證することにもなる。開発教材を公開するときは、先行事例を参照・検討すること、そしてそれを明記することを習慣化してほしいと思う。

もちろん、他者の開発教材を日々の授業で実践するとき、子どもにそのようなことを言う必要はない。そしてよい教材はどんどん真似されて広まるべきであろうし、また自然なことであろう。ただ、それを「公開」する場合は違ってくる。例えば、このようなことが実際にあったらしい。ある県の教員研修会で、ある教師が開発した教材を、別の教師が自身の開発した教材として発表していた。その研修会に教材をつくった教師本人が出席していたためそのことがわかったそうである。現在、研修会等での発表は、文部科学省の動向や権威的文献に触れても、具体的な参照事例には触れないのが一般的らしい。ただそれでは教材を一生懸命に開発した教師は残念であろう。そして開発者はその教材が成功するのに大切な要素を企業秘密として隠すようになってしまい、他の教師には成功困難な教材となることが懸念される。そして、教材よりも開発者の高度な指導力だけが称賛される。これでは図画工作・美術科教育の実践や研究の充実・発展を阻害してしまうのではないかと心配する。学び続ける子ども同様に、教師も学びをお互いに認め、助長しあってこそ、安心して学び続ける教師となり得よう。

(共同研究者：島根大学教育学部、有田 洋子)